

吹くからに 秋の草木の しをるれば

むべ山風を あらしといふらむ

残暑の名残も夕闇に消え、九月の風が黒いパーカーの襟元から入り込み、ひやりと俺の首筋を撫でた。駅前の商店街を歩く人影はまばらで、まだ開いている店の明かりがぼつりぼつりと灯っていた。

俺は、商店街から一本脇道に入り、「染井呉服店」という看板をかけた一軒家の前に自転車を止めた。カゴから斜めがけバッグを手にとってパーカーの上にかける。半分下ろされたシャツターをくぐると、少しくせのある茶色い髪の毛がまつ毛に落ちかかってきて鬱陶しい。俺は軽く頭を横に振った。

透明な自動ドアには、いつものように隙間が数センチだけ開けてあった。俺は電源が切つてある自動ドアに両手をかけて、力任せに横に引いた。

照明が落とされて薄暗い店内に入ると、壁際だけが明るく、白つるばみの着物が衣桁いこうにかけてある。和装用品や小物が並べられた棚の向こうに艶のある黒髪が見えた。

「若旦那」

俺は棚の隙間を通り抜けて壁際に歩み寄った。藍色の木綿の着流しにたすきがけをした店の主人が、黒い切れ長の目を俺に向けた。

「直也。着付けを習いに来た時は先生と呼べ」

若旦那は耳に心地いい低い声で俺を叱ると、再び手の中の帯地に視線を戻した。

大学まで剣道部で鍛えたという長い腕が伸びて、焦茶色こげちやの

足元の風呂敷の中には、綺麗にたたまれた着物と長襦袢、角帯、腰紐が二本用意されている。一式全て若旦那からの借り物だ。

光沢がある若竹色の着物と薄萌葱の長襦袢は、若旦那が中学生の頃に着ていたものらしい。一〇年以上前に役目を終えた着物たちには、少々たびれた感じがある。

俺は、母親に洗濯してもらった肌襦袢と裾よけをバッグから取り出した。

腰に裾よけを巻きつけて紐で縛って固定し、素肌に肌襦袢を羽織ってから長襦袢に袖を通す。淡く、少しくすんだ緑色の生地が、身を包む感触が心地いい。

長襦袢を体に沿わせるようにまどつたら、腰紐を手にとつて腰骨の辺りに巻きつけ、しっかりと結ぶ。

和服にはボタンやファスナーがない。長襦袢も着物も、紐で押さえて結ぶことで着物らしい形を作っていく。

「長襦袢を着る時に背中を丸めない」

顔をあげた若旦那が、めざとく俺の姿勢を注意した。

「はい」

俺は生返事をしながら若竹色の色無地を眺めた。

しなやかな竹を思わせる明るい緑色の着物に柄はなく、背中に一ヶ所だけ、染井家の家紋である下り藤が染め抜かれている。

若竹色という色の名前も、柄のない着物を色無地と呼ぶことも、藤の花が抽象化された家紋に下がり藤という名前があることも、全部若旦那から教わった。

俺は長襦袢の上に色無地を羽織って体に巻きつけた。

若旦那がカウンターから立ち上がり、藍色の裾を乱すことのない美しい所作で近寄ってきた。着物の上に腰紐を巻いた俺の姿を見てため息をついた。

「また左前になつてるじゃないか。左前は死装束だからそれだけはするな。何度言ったらわかるんだ、お前は」

「だから、左側を前にしたらいけないんだろ？」

「逆だ、逆。左前というのは、左側が自分にとって手前にくること。両手で衿先を持ったたら、まず右側を体に沿わせ、その上に左側を合わせる。長襦袢からやり直し」

俺は若旦那に背を向け、渋々腰紐をほどこきにかかった。

五月の連休明けから習い始めて、まず浴衣の着付けを習い、九月になって本格的な着物の着付けを練習するようになった。だけど、こんなふうにダメ出しをくらって、なかなか袴の着付けを教えてもらうことができない。

一旦色無地を脱ぎ捨てて、今度こそ左右の衿合わせを間違えないように長襦袢を着直す。

「教え方が悪いんだよ」

俺が小声で毒づいたのが聞こえたらしく、鏡に映る若旦那の目に意地の悪い笑みが浮かんだ。俺はとっさに距離をおこうとしたけれど、薄い肩を強い力でつかまれ、身をよじつても身動きが取れない。

「わかりやすい覚え方を教えてやろうか」

背後から耳元に唇を寄せて若旦那が囁いた。衿の合わせから滑りこんできた右手が、俺の長襦袢の中で左胸を探るように撫でまわす。

「えっ……」

若旦那が閉店時間を過ぎても接客をしているのは、よくあることだ。だけど、若旦那は葛木先輩のことを「雅さん」と呼んでいた。優しい声で。

胸の内側が灼けただいたに息苦しかった。

俺はぎゅつと強く腰紐を結んだ上に、乱暴な手つきで博多献上の角帯を巻いた。性急に結ばれた一文字は、左右のバランスが悪く変なところがめくれあがっていた。

反物を壁際に積み上げていた若旦那が、ちらりと俺の様子を見た。

「嫉妬か？」

違う、と叫びたかったのに、俺は声が出なかった。

若旦那が皮肉っぽく笑った。

「お目当ての女性というのは雅さんか。美人で、物腰も優雅。気品があつて礼儀正しい。雅さんとお前じゃ釣り合わない」

俺は頭に血が上った。

「葛木先輩のことをそんなふうと呼ぶな！」

雅さん、という呼び方の自然さが腹立たしかった。

葛木先輩のことを当たり前のように雅さんと呼ぶ、この男が憎らしくて仕方なかった。

「俺が彼女をどう呼ぼうとお前には関係ない」

若旦那が立ちあがって、藍色の裾が乱れるのもかまわずにつかつかと歩み寄ると、乱暴に俺の右手首をつかんだ。

「放せよ！」

俺は若旦那の顔を見上げてはっとした。いつもからかうような表情が浮かんでいる漆黒の瞳が、凶暴な光を宿して俺を

睨んでいる。俺はそのまなざしに射すくめられたように動けなくなった。

しゅるり、と若旦那が俺の角帯と腰紐を解いた。重たい袴の色無地が長襦袢の肩から滑り落ちた。

「いたっ……」

強い力に肩を引き下ろされて、乱れた着物の上に俺は両膝をついた。薄萌葱の長襦袢が肩から落ち、縹色の半襟が肘に絡みついた。若旦那がはだけた胸元に唇を寄せて、左胸の尖りに音を立てて吸いついた。

「やめっ……」

鎖骨へ向かつて胸元を唇が這いあがってくるとともに、体の奥から肌をざわつかせる感覚が沸き起こってくる。

後ろから強い力で腰をひかれて、俺は堪らず着物の上に両手をついた。視界が青みがかった緑色に染まった。背後から伸びてきた手が、長襦袢の裾から俺の体の中心に触れようとする。

とつさに逃げようとした俺を咎めるように、熱の中心を乱暴に握られ、俺はびくんと背筋をそらせた。

「やめ……わかだんな、やめてっ……」

片手を俺の脇について背中からのしかかっている男は、俺の哀願など聞こえないかのように俺自身を責め立てる。

男の手の中で屹立したモノが先走りをこぼし始めた。

「着物が……汚れるッ……」

俺は歯を食いしばって腕を突っ張った。若竹色の着物からは既に体温が消え、その手触りはひんやりとしていた。涙で濡れた頬が触れたら、間違いなく汚してしまう。